

特色G P 「教養日本力」高度化推進プログラム フランス出張報告書

調査者：東京外国語大学教授 河路由佳

教務補佐 三宅李佳

訪問先	国際大学都市日本館・パリ日本文化会館 フランス国立東洋言語文化大学（イナルコ）・東洋語図書館 ルーブル美術館、オルセー美術館、ギメ美術館、他パリ市内の美術館
訪問目的	<ol style="list-style-type: none"> 1. イナルコにおける「源氏物語」に関する共同授業を実施、日本語の授業を見学し、イナルコの教員や学生との交流を図る。 2. 学部2年生を対象としたアンケート調査、卒業生に対するインタビューを実施し、イナルコで日本・日本語を学ぶ学生の意識に関する理解を深める。 3. 日本のマンガ・アニメ・DVD・CD・フィギュア等を扱う店の視察、現代のパリにおける日本の文化享受の実態について理解を深める。 4. 東洋語図書館においてレオン・ド・ロニーの著作を閲覧し、19世紀フランスにおける日本語教育の始まりへの理解を深める。 5. 日本語学習書を収集する（マンガを用いたものを中心に）。 6. 国際大学都市日本間、パリ日本文化会館等への訪問、またパリ市内の美術館見学を通して日仏文化交流への理解を深める。
記録の方法	写真・録音・ビデオ
日程	<p>2009年2月18日～23日</p> <p>2月18日 東京発、パリ着。ルーブル美術館見学</p> <p>2月19日 国際大学都市訪問、パリ市内書店にて文献収集。</p> <p>2月20日 フランス国立東洋言語文化大学教員との情報交換、授業の打ち合わせ、パリ市内の書店めぐり等</p> <p>2月21日 パリ市内散策、史跡見学、パリ日本文化会館訪問</p> <p>2月22日 オルセー美術館他パリ市内美術館見学</p> <p>2月23日 フランス国立東洋言語文化大学において授業を実施、東洋語図書館で文献閲覧、パリ発</p> <p>2月24日 東京着</p>
実施報告	<ol style="list-style-type: none"> 1. イナルコの教員と2月20日に情報交換、共同授業の打ち合わせを実施、2月23日10:00-11:30に源氏物語に関する特別授業を実施した。訪問期間がちょうど大学教員に対する法案をめぐるストライキ中であったため、フランスにおける少数言語教育・古典教育に対する教員たちの危機意識を知ることができた。100年とも150年ともいわれる期間を要するとされる「源氏物語」の翻訳プロジェクトについても状況をうかがうことができ、日本の古典を学ぶ学生を対象に、

イナルコの2名の教員と訪問者（河路）との共同授業を実施することを通して、日本の古典教育の意義を再認識することもできた。修士課程の授業見学においてはフランスの言語教育をめぐるディスカッションを見学することができ、学生たちのフランス語や英語に対する意識についても聞くことができた。フランスにおいても英語の重要性はますます高まっており、それ以外の言語についての教育、学習軽視の傾向が進んでいるようであるが、東洋語の研究教育を担っているイナルコにおいてこの状況をどう考えるかという大きな課題に直面しているようであった。そんな中で、日本文化の価値、多様性と可能性を認識し、その学習、研究への意欲を示す学生や教員に接し、今後の交流推進、日本文化の発信の量的質的充実の必要性を再認識した。

2. 2年生へのアンケート、及びインタビューについては、別紙にまとめたので参照されたい。
3. 2008年は日仏文化交流150周年に当たり、2008年度は大学都市日本館、パリ日本文化会館では記念行事が行われた。2月19日には国際だ学都市日本館、21日にはパリ日本文化会館を訪問し、それぞれの関係者にそれらの状況についてうかがうとともに、それぞれの施設を見学、また蔵書を閲覧した。23日には、19世紀半ば、フランスで最初に日本語の体系的なテキストを著わしたレオン・ド・ロニーの膨大な著作を閲覧することができた。また、1850年代から1920年代にかけて日仏の交流があったパリ市内の街並みや美術館を散策、閲覧し、当時をしのいだ。
4. 日本語学習書については、マンガを用いた教材に注目して収集した。パリ日本文化会館の書店をはじめ市内の書店をめぐり、マンガを用いた初級主教材、年少者用の教材、文字教材、および会話用副教材を購入した。市内の書店では、日本のマンガのフランス語版が多く売られていた。それらの状況を視察、また、「マンガ喫茶」やマンガのキャラクターのフィギュアやコスプレのための衣装などが売られている店も訪問し、日本のサブカルチャーの享受の状況を確認した。
5. 日仏文化交流への理解を深めるために時間の許す限り街を歩き、美術館等を訪ねたが、特筆すべきは、ルーブル美術館において世界の5人の漫画家にルーブル美術館にちなんだ作品を委嘱するというプロジェクトが行われていたことで、5人のうちの1人は日本の漫画家、荒木飛呂彦であった。パリにおいて日本のマンガは文化としての高い評価を与えられていることが確認された。